



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

國流儀天狗卷之四

大三十九

卷之二

○書生医考

門 13
卷 1933-4

やうめふをもとめゆく、三ふみすすく、せとどちの
と清づゆひ。ゆりやまきもく、國ゆも宵は月夜更てちよ
くかづらひ下とあかーヌ事所もお引ゆせぐと
ゆとやく更へおれり摩^マハ門^ムが急へてゆくとびと
アはくうが^シ空^カく知^シらぬのが^シまくおまハ秋^シのよ
利^シぬちゆ^シあひ^シの^シり^シう^シが金^シ秋^シちう^シ日^シらぬ^シの^シり^シ
さハたゆふも^シう^シきと^シご^シも^シ間^シも^シも^シらふむ^シう^シふ^シつ^シる^シ
傷^シきの^シ療^シ治^シゆ^シ一^シゆ^シた^シが^シも^シす^シの^シに^シ奉^シ候^シと^シ一^シ
す^シと^シあ^シな^シぞ^シお^シと^シす^シと^シご^シも^シお^シ身^シ



すうしのうを續へしむるるい年が間へまく西向移る事
て、うつむきむり直つて、初重つて西向ふえて、さうすらとけり
あ物の御事ひしん様へとす。トドヤイナ又そろせんる
て是のハ必ずかねがゆの、廢経トやゑすいおみのあくじ
ト、医者、之をやう解すめども、(サアおづかふ人)不
能、あとハ後うめぬで、海のので、ゆきナハ空くせむるの、医
者、蓮の御ひじよ、(おもねれ)の、御ひじよ、(おもねれ)の、
御ひじよ、(おもねれ)の、(おもねれ)の、(おもねれ)
は直手トや。(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
アノナセリふ附く有の、緊うねとこそ、(おもね)の、(おもね)

書くにあく、居職とむく、居とせよ、あくへ我を、往
て、まつう、(医)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
とおもね、(医)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
から、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
く、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
て、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
おもね、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
へ、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
来く時、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)
ぞ、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)、(おもね)

文富ふんじやく物りよみや相應乃義利と法より有
物やせりやまのを始一も八十年歴下のらあくまで
西もひのーもあらぬ者を達生婦のあせ宿はあく裏
旅を傍々苦い處くに雪中の素後もむりに笛みて
持度ゆき詰れ五貫も貸してせりと親うる深いはきも
育どちのつねあくまうすはあくじやあくおのうの
新ぐ物入へとを知りて居るうもつむとくとくとくとく
き止め立が立ちて面白ひおつやとく通の音人學よとや
らをせねば夢ほの仕やく、知らねども大恩情く教す
乃娘子を薦遣へとくわゆよう要して直りせりじと

トたあすくせ○甚ねよおりしよあきとどもねも心
一かく情ゆて居てもいふ又のうのうりはたのと角でござう
すれぐへ絶とつめじや海ごたまく物うみゆりよあおこが
様者よや多びうもろ若じや玉の柳ともとが森の
内えよもふ来るとりうるもふ細くあるすが寄翁うそ
まくもき季あはれやふ来い遊ひと徳兼うとふづく
ことよおぼりすせんうく縫がせんあすりの物ぐもすひく
ながい御らの内有物じやかなし希饗じやとあひてう
れらんぐ医者宿とよはは急病の時をもじやるが
けに医一やまとうぬぐちやのもんつき医者
のきずのひりひへふあるあらうあらうへ
アコレのふあくが

乃ハもあこのうふじやるのよ○ヨリーやうやアハ行と云て
もほってゆめもひすりミーへんねつやふーの業トや
ナヒセモうらぬひつや△エ、いミーもあひく、時日
あキテのゆきを聞とがたけこちもほが素々長嶋ノお
医者小柳ミ能く見れて、もみとからおはり上さきと
おちの医者どんみまく見て、ほが意想あらぬ肉
筋もあもてにきし物がこへやちやれ心乃肉筋がくわやびと
いへやう丈ふお形くおやうもまろい療治にてアノむもさご
を死へたらどうなるかと確かとつきとつと聾^ひとも
聾^ひとも育^あ育^あともとくわだるが見て見やして始一人と持ふ

振ともアノ医者處の下もお故と一生恨を繰る物の多く
とおぐらふあるみじやがれの○医者まよ
まをせう強ふ致當つゝひでても大もみひ事じやが
大坂へ来くちや強ふ負がうせ苦ちやうり因へりで
き行住店がやけと氣もんド獨ひ見る相ゆもふ
悪と勘れるがもあうとばく口と真あふくとあせん
間じやもんじやが氣でもきくやうふ思ひもくとあせん
やのせんをまくとへあへふ是中豆の垢やくそもあれ
解^{わか}とニ角^{くわ}の解^{わか}のやうふあくと刻^{くわ}らとどもの

つせんないのふあごはんがも得まますとし
めうきほもむひあらわしむ國づ、初めうきうき
「繩ふ育ててよや物洗門のあぬ布子一ツで、
め室、おおがきを思ふく葉で、もちりとあゆ、
さうたひととき修何この界、近づく大般、
只くすすむあい事お直を向ふのを、
の志じや医いもくやわあがての、御ゆかく
居ましに保まりありまのわゆましも神ひあひでござりゆ
せゆもた強たけるもくらくらゆ、ざくらもくら
あくらもくらのアノ子の
あくらもくらのアノ子の

○何うよドヤリトモ
見ぬぞモサセアラヘシトモ
スルノ物ドヤガトモ
アリタレ
アリタレ
アリタレ

欽世水
△往來

四部

□ 源たか内

経上りす。す。是ハち。今。の。事。の。也。く。前。
之物と取へうま。ば少。然。人。も。え。」ゆきづ。ア。是。ハ。此。
多。あ。し。を。の。お。津。陽。と。連。と。酒。送。め。の。主。人。
ト。や。ち。一。ひ。ら。ぬ。事。が。す。物。や。ち。一。日。折。
且。さ。き。ゆ。た。の。ソ。ア。海。か。島。ハ。ナ。の。ふ。山。す。首。が。
足。よ。き。く。と。多。あ。り。い。ど。お。と。で。お。び。く。と。ま。れ。イ。ヤ。聖。若。
と。ほ。聲。ま。れ。○。是。ハ。先。生。而。用。あ。い。所。と。り。機。と。
の。身。と。仰。ひ。ん。す。や。と。ざ。く。日。ハ。被。あ。い。用。ま。う。立。ま。
ま。と。得。ま。じ。め。考。や。か。新。す。あ。考。す。中。だ。ち。不。可。用。す。あ。
川。と。水。ふ。急。す。と。急。す。そ。に。せ。や。小。舟。ま。

志久村乃

屋上

か

まし



下まきよめちを謝れ、ひあくまく、
お此村氏事のあがみと、前がむかひの
すらぬる新底トガ前お迎て、なれも甚、
ほりまくさく、うむけづむくもあへにせ
浦金利も、うが前もひるき、ちくは、
アセアヒ、サヌヘ生ハ内、あくこく、
トちドつときの、内、柳原水調、かく、
まわらび、と、ふ其の、田舎、と、よも、
まく、の、絶縁、が、ち、うみ、延引、
まく、の、代、相、も、ま、事、大井、い、の、あ、ひ、人、

往々あはれ軍も直一トモニキセ口も煙草のふたごハ勿
くこりてるとまく清物考在宿今ち経得中とい
へるくまづけへとちゆの能の外大へふく機轡在宿上場御うく
臺やて、ひそかに理あらへ、ナドソ直せや、ひまつれ
て、生名古屋の方と相え、一ノ房ざくさくおもきくまつは三郎小作らど、傳ぐる
むつゝ夢にし聞在宿口そん便りもひすりや、日下在宿
見、ひらひら、ほんとあらぬ後は、御れいよ、一曲在宿
ふまつあらかねがみを、旅するだらば、ごくまくはまく

あざくまひが「やうへ」を手と取てから「あぐへ」と
をやめ、「あさせやあはる○せうへ」^因、
アサヒ^ほ「あらぬ小瓶^{まら}が附^つ」^因、「あざきはあくちす
じやまくも」^因、「あらねお^{まく}」^因、「あらねお^{まく}」^因
極^{きわ}「^{在ウタヒ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
あいやうみへ来りや^え「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
大然^{おほ}「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因
「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因、「^{アシカ}」^因

あらのよどやせはやうふからでくくねーが骨折くつき
かやかく骨接くつけで療治りょうぢひひがあひひのとみを能なく
くまうが利きひでらかくもあひ物ものトやト且たゞフリヤ二人ふたりにて
私わたくしとややざくにのどや十

字也也也也

△ 以教医者 □ 女肩 ○ 以主医者

トやれ室侍 あはれ御宅ひしとを手取るやうに
ト、あひ歎く康ちの盡みのみハテビ隣を表すといふ
事度寫ぐと人トや口まハ船ノも軍て所あら
久兒小迎承の要ひすを又あひよみやくに有聲とはな
りてアドヤ取うちあ医サアヰとドヤセヌ、さう思
ひよりとまづおと近ねの人よ見ゆばよみやくせうこつ
ま近う見に乃きふあらのトや口あく
ト仁の通でも肩まくサアヨイ——「ヨヤサンサヨイ」と
ヨヤサン医院ハナツモあつたまむ知とソレにが口せれども
おもふうぬと重い物、何も起ぬ事す小拍子どもあ

國朝詩天子卷之四

廿四

文國堂

物事すすりも歌ひまふ優長らしは筆をもじだれも
丁兎が歌ひ居て身を取へぬくにあくまくの心事
もよと車へあひ大ゆか細僅を顧みばや口宣傳をまへゆ
ちゆのやひくを小曉のあひくよ△ちせ跡くはまつてゆ
夫を私ノ名もうづ改ふ國原生をまほ女お摩にゆく
ちよくまくの猪口とゆ△をほろ生をあめのわ
相の後をもぐく起てゐるて育てくわだく昇△殊ふ大富
よ萬時未教鳥虫のわゆる甚ざ國のさゆきどもテモ
すと深べつと深むるのどや□はれ其様小恩よもや
實をかよせ事とゆて莫とぞすちゆあひ今△たゞの



三の二
かくさううき
第三

いとくやきばせむもとくとほくうあひ帝のやくみ高寺
とくらるア箭とけすけはんとくへ大ひ小相送ハシメテよハあふぐ
あ送ハシメテドやハシメテまことうへりあちハシメテおまきのハシメテ波ハシメテをうけた
まくハシメテあつまきハシメテと生ハシメテ毎日ハシメテ送ハシメテよ

風流角子集卷之四終

六

